

文書館 もんじょかん 動物記



書庫に棲む動物たち

③

戌

「犬追物口伝日記」奥書（毛利家文庫 15 文武 11 「騎射紀事料案」）

いぬ

中世の武将と「犬追物」

鎌倉時代の武士は、日頃から武芸の訓練に励みました。この訓練として笠懸・流鏑馬とともに行われたのが、走る犬を馬上から射る「犬追物」です（騎射三物）。なかでも犬追物は広い土地や多くの人馬に加えて数多くの犬の準備が必要だったため、有力な武士のあいだで行われました。

室町時代になると犬追物はしだいに定型化し、また小笠原流などの流派の「口伝」（くでん。秘伝を師が弟子に直接伝授すること）が行われました。写真は、小笠原流犬追物の「秘説」が文明 14 年（1482）に陶尾張守（弘護）に対して伝授され、その大概を記した記録が与えられたことを示すもので、その記録の原本は防府市の毛利博物館に現存します（複製物は当館で閲覧可能です。裏面参照）。

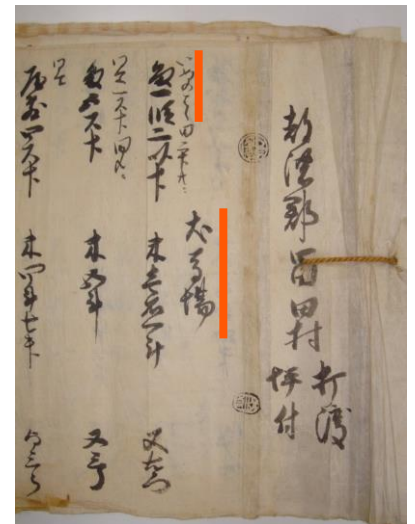
陶氏がさかんに犬追物を行っていたであろうことは、天文 7 年（1538）5 月におそらく山口の「陶殿」で犬追物が行われていること（「毛利隆元山口滞留日記」）や、当時の陶氏の本拠である富田保（現周南市）に「犬馬場」（犬追物が行われたフィールド）という地名があったことなどからうかがえます。

大内氏もさかんに犬追物を行いましたが、16 世紀の大内義隆の時代になると、しだいに娯楽色の強い競技となっていたようです。

防長における犬追物は、近世に入り、毛利氏の時代には廃絶しました。動物保護の観点からも、今後も決して復活しない競技だと思われます。

その意味では、これらの記録は、犬追物という文化のありようを知ることができる、たいへん貴重な遺産ともいえるでしょう。

「犬馬場」という地名



「犬馬場」（いぬのばば）地名は、当館の徳山毛利家文庫 打渡帳 30「防州都濃郡富田保打渡坪付 五」（元和 8 年（1622）、写真）や同 57「寛永御打渡牒」（寛永 3 年（1626））に見えますが、その後は見えなくなります。犬追物の廃絶とともに消えていった地名だと考えられます。

大内氏関係の「犬追物」の記録

和暦	西暦	出典	主催	大内氏	場所
明德 04	1393/10/19	後鑑	足利義満	大内義弘・弘茂・満弘	泉州堺
明德 04	1393/10/21	後鑑	足利義満	大内義弘	泉州堺
永正 06	1509/03/27	実隆公記	足利義尹	大内義興	京 室町殿
永正 07	1510/04/03	実隆公記	大内義興	大内義興	京 大内義興許
永正 07	1510/04/12	道照愚草	大内義興	大内義興	京 吉良殿御所
永正 07	1510/07/07	犬追物手組日記	大内義興	大内義興	京 大内殿馬場
永正 07	1510/07/19	犬追物手組日記	伊勢貞陸	大内義興	京 伊勢守馬場
永正 07	1511/08/09	実隆公記	大内義興	大内義興	京 大内宿所
永正 08	1511/06/28	実隆公記	細川高国	大内義興	京 細川方
永正 10	1513/09/14	後法成寺関白記	細川高国	大内義興	京 細川方
天文 07	1538/5/16	毛利隆元山口滞留日記	陶隆房	大内義隆	山口? 陶殿
天文 07	1538/5/18	毛利隆元山口滞留日記	大内義隆	大内義隆	山口 殿中
天文 07	1538/6/16	毛利隆元山口滞留日記	大内義隆	大内義隆	山口 殿中

「犬追物口伝日記」（「毛利家文書写真帳 191」、現物は毛利博物館蔵）

